

教育相談事例検討における SNS を用いた討論の試み

相模 健人

愛媛大学教育学部

An Attempt to Discuss Educational Consultation Case Studies Using SNS.

Takehito SAGAMI

Faculty of Education, Ehime University

I. はじめに

2020年より流行した新型コロナウイルス（2019-nCoV）の影響により、大学授業ではICT（Information and Communication Technology の略）を活用した遠隔授業が活用されている。樋口ら（2021）は遠隔授業についての学生アンケートを数量的・質的分析を行う中でオンライン授業がさまざまな問題を抱えていることを認めつつも、対面授業が全面的に優れているわけでもなく、オンラインだからこそ学生に学習しやすい環境や学びが深まる可能性を指摘している。また、大川内ら（2021）は授業の遠隔化の教育効果について、成績データから分析したところ、単位を取得した学生は成績が向上し、オンデマンド型授業の利点を確認できたが、単位取得できなかった学生数の増加を指摘している。このように遠隔授業で積極的に活用されており、大学授業でのICTの活用がさらに求められるところである。

ところで筆者の専門である臨床心理学や教育相談ではしばしば事例検討が行われてきた。事例検討について鶴田（2001）は「参加者の反応を『聞く』ことが意味を持つ。参加者一人ひとりが自分の関心と関連する質問や意見を述べることによって、事例についての理解を深めることができ、今までにない視点を得られる場合もある」と述べており、学習機会として重要であると考え。スクールカウンセリングの分野でも村山（1998）はスクールカウンセラーの専門性のメリットの一つとして「（教師を含めた）事例検討会の実施」を上げており、教育の分野でも事例検討の

必要性が認められる。

筆者は教員養成を目的とした「教育相談論」の授業で度々このような事例検討を行ってきた（相模・渡部，2004）。このような授業を行うことで学校における教育相談上の諸問題に対する態度の変化や対応の心構えを身につけていることが考えられ（相模，2006）、学生による事例検討の討論は教育相談を学ぶ上で有効と考えられる。前述した遠隔講義においては ZOOM や Microsoft Teams によるブレイクアウトルームのような機能を用いず、ソーシャルネットワーキングサービス（Social Networking Service, 以下 SNS）の一つである LINE を用いた討論を行っている（相模，2021）。ビデオ会議システムにおけるブレイクアウトルームの機能を用いない理由として学生自身の通信の問題があり（相模，2021）、学生が通信を気にしない安定した討論を行うため、SNS を用いることとした。また SNS の中でも LINE は学生の 99.5% が利用している（東京工科大学，2021）という調査があり、大多数の学生が使用している。前述の相模（2021）では LINE を用いることで意思疎通や文字入力の違いがあるものの、文字に残すことの利点が評価されている。杉浦^昌・杉浦^伸（2016）は SNS を高等教育に活用し、効果的に行えれば、授業での学生の孤立感を緩和できることを述べている。

そこで本研究では学生の遠隔授業内における事例検討の討論において SNS を用いて討論を行った成果と課題について、学生に自由記述による調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach, 木下，2003，以下 M-GTA）を用いて

分析して検討することを目的とした。

II. 授業について

1. 対象授業

筆者が法文学部・工学部・農学部合同授業において担当する「教育相談論」の授業。2単位、3年生対象の授業である。開講時期は令和3年度後期にあたる2021年10月から2022年2月、全14回であった。本授業は教職科目Aに属し、教職免許取得の必修授業である。受講対象者は法文学部・工学部・農学部3年生となり、受講登録者数は66名（平均出席者数56.00名）であった。授業は同期遠隔形式でビデオ会議システム「ZOOM」を用いて行った。授業内の討論については前述した通り、LINE株式会社が提供するコミュニケーションアプリ「LINE」を使用した。授業最初に筆者とLINEで友達になってもらい、授業全体のグループに招待した。事例検討ごとにランダムに作成したグループ割を学生に送り、各グループを作成してもらい行った。

2. 事例検討について

事例検討については筆者がスクールカウンセラーとして担当した事例を3事例紹介した。いずれも学会発表や論文作成時にクライアントの理解を得ているものである。これらの事例について第5, 8, 11回授業について検討した。

事例検討を行った授業は以下のように行った。事例の概要を筆者が紹介した後、LINEグループに分かれ、「あなたが担任教諭ならどう対応しますか？」のテーマで15分討論を行う。グループの報告者がZOOMのグループチャットに書き込み、筆者が内容に応じて質問を行う。その後、筆者から事例の経過を説明し、再びLINEグループに分かれ、「事例の感想」「質問」のテーマで10-15分討論を行う。最後に学生からの質問を受け付け、筆者でまとめを話して終了となる。

また第14回授業についてはレポート課題（架空事例に対する教員の対応）についてレポートを共有し、共通点についてLINEグループにおいて討論を行っている。

III. 方法

1. 調査対象者

最終回出席者50名を対象に有効回答数36名を分析対象者とした。

2. 調査内容

研究目的に沿った調査項目を独自に作成した。具体的な調査内容は表1を参照されたい。最終授業回においてMicrosoft Formsを用いて、自由記述してもらった。

表1 調査内容

質問内容
(1) LINEを授業で使用することを知ったときの感想を教えてください。
(2) 授業のLINEグループに入ることに抵抗はありましたか？あればその内容を教えてください。
(3) 初めて授業内で事例についてLINEで討論してみた感想を教えてください。
(4) LINEで討論して、やりやすかったところを教えてください。
(5) LINEで討論して、やりにくかったところを教えてください。
(6) LINEで討論して、事例の理解が深まったと思えるところはどんなことですか？
(7) LINEで討論して、もう少し情報が欲しかったところはどんなことですか？
(8) LINEでの討論での利点を教えてください。
(9) LINEでの討論での課題を教えてください。
(10) LINEでの討論の感想を自由にお書きください。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については筆者から最終授業回において調査対象者に研究目的を説明し、了解が得られたものを調査対象としている。結果、論文内容においても了解を得たものである。

4. 結果の分析

調査で得られた回答について、M-GTAを用いて分析を行った。分析テーマはSNSを用いた討論を行うプロセス、分析焦点者はSNSで事例討論を行う学生とした。M-GTAの手順は、まず回答から分析ワークシートを用いて、説明概念を生成した。次に複数の概念からカテゴリーを生成、最後にカテゴリー相互の関係から結果図、ストーリーラインを作成し分析結果をまとめた。

IV. 結果

M-GTAの結果から、57概念と17カテゴリー、4上位カテゴリーを生成した。カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめて、簡潔に文章化し（ストーリーライン）、結果図を作成した。以下、概念を『』、カテゴリーを【】と表記する。

1. 各概念とカテゴリー

結果から一つ概念を例示する。調査結果から、受講学生はLINEで討論することはZOOMのチャット機能と比べて便利だと感じている。これらから、LINEで討論することは便利であることを共通点として、『便利』という概念を生成した（表2）。

さらに『便利』という概念を含み、『普段から使っている』『便利』『声を出さなくていい』『資料の共有』『まとめやす

表2 概念例 『便利』

定義	LINE で討論することは便利であること
ヴァリエーション (具体例)	うまく活用できるならかなり便利になるなど純粋に思いました。 特に、zoom のチャット機能を使うよりは、討論する上では便利だと感じる。
理論的メモ	LINE で討論することは ZOOM のチャット機能と比べて便利である。

表3 カテゴリー例 【機能の活用】

定義	LINE の討論における機能の活用
概念名	概念5『普段から使っている』
	概念10『便利』
	概念30『声を出さなくていい』
	概念33『資料の共有』
	概念36『まとめやすい』
理論的メモ	概念5：学生にとってLINE は普段から使っている身近なものであり、勝手に分かっている。
	概念10：LINE で討論することは ZOOM のチャット機能や使えないことと比べて便利である。
	概念30：図書館や自習スペースなどの場所でも LINE での討論では声を出さなくていい。
	概念33：LINE でレポートや資料の共有をやすく、活用している。
	概念36：LINE での討論は文字で示されることから、カット&ペーストの機能をうまく使って意見をまとめやすい。

い』という概念と合わせて、一つのカテゴリーを生成した。学生がLINE の討論における機能の活用を表すものとして【機能の活用】というカテゴリーを生成した(表3)。

このように、概念の生成・修正を繰り返し行い、それに合わせてカテゴリーも生成・修正を行った。36名分のデータ分析を終えた時点で最終確認を行い、理論的飽和に達したと判断し、最終的に57概念と17カテゴリー、4上位カテゴリーとなった。

2. ストーリーライン (図1)

以下に示すのが M-GTA の最終的な結果となるストーリーライン及び結果図である。

LINE で事例討論を行う学生は【討論開始前の反応】として、LINE の討論が『どうなるのかわからない』と思い、『不安がある』といった【分からず不安】という反応や、LINE を『プライベートなものゆえの抵抗』があり、授業で用いることにより、教員や知らない人と友達となることを『面倒だ』と感じ、授業後もLINE に『記録が残ることの抵抗』という【抵抗がある】ことから【LINE を用いることの抵抗】がある。一方、LINE を授業に使うことに『驚いた』と感じながら、『面白そう』と授業のLINE グループに入ることに【抵抗はなかった】という【関心がある】

学生もいる。

このような学生がLINE で討論を行うとさまざまな【LINE 討論の課題】が見られた。まず、学生は討論のためのLINE グループ作成にあたりグループに追加されない、グループが作成されるかといった『グループ作成のトラブル』があり、同じグループの人を探して『グループを作るのが大変』だと【グループ作成の困難】を感じている。討論を始めるにあたり【グループメンバー】について学生はLINE グループでは討論相手が『どんな人かわからない』ことから緊張しており、討論の前に『グループの学生の情報がほしい』と考えている。実際の討論では学生は『文字を打つのに時間がかかる』ことがあり、『意見が投稿されるまで時間がかかる』ので待たねばならず、文字を打つのが遅い学生は討論が進んでしまい、『話にうまく入れない』ことがあり、発言する人とならない人が存在し、全員の意見が聞けないといった【発言の有無による弊害】があるという【文字入力の問題】が見られた。さらに『非言語的情報がわからない』ことや、『発言に誤解が生じる』こともあり、困ることや不安があるといった【非言語的情報がない】ことの困難がある。討論の『やり方がわからない』ため混乱し、短絡的に『意見を言うだけ』になることもあり、進め方やテーマといった【討論のやり方の情報がほしい』という【討論方法】の課題がある。そもそも学生はブレイクアートルームなどの機能を使って『討論は話し合いたい』、その方が早いと考えている学生もいて、『討論が進まない』ことも起こり、対処が必要と考えている。そのせいか、『事例の理解が深まったところはない』と考え、討論が『やりにくい』と考えている【討論の難しさ】がある。

逆に【LINE 討論の利点】も多く見られている。学生にとってLINE は『普段から使っている』ものであり、勝手に分かっていることから、LINE でレポートや『資料の共有』を行い、文字での表示をカット&ペーストの機能をうまく使って意見を『まとめやすい』。図書館や自習スペースなどの場所でもLINE での討論では『声を出さなくていい』といった【機能の活用】を行っている。討論では学生が自分で『考える時間』があり、整理ができ、顔が見えないので、『自分のタイミングで発言』できることを感じている。学生は気兼ねなく発言し、『緊張しない』ので、チャットやグループディスカッションよりも『意見を言いやすい』、じっくり考え、『自分の意見を伝える』【意見表明】ができています。その意見に学生は反応機能やスタンプを使って素早く『意見に反応』し、文字が残っているので遡って討論し、『理解し直す』ことができ、他の学生の意見に返信機能などを使って『質問する』ことができる【機能的利点】がある。その討論内容が『文字で残る』ことが学生は利点と考え、『平等に参加』できたり、視覚的に見ることや他者や自分の『意見を整理しやすい』ことや出てきた意見を『比較検討』し、『共通点』も探している。ま

た『振り返りやすい』ことから授業後に復習に使っており、学生の学習機会となる【文字で表す利点】がある。結果的に【討論の円滑さ】があり、学生はLINEの討論に『やりにくさはない』、気楽に反応しやすく『討論しやすい』と感じ、反応が早いなど『スムーズに討論』しているときもある。

このようなLINEの【討論の感想】として学生は自分とは『異なる意見を聞けた』ことで考えの幅が広がり、多くの人の意見が聞け『意見交換できた』。『事例の追加情報はいらぬ』と感じ、討論を重ねるごとに、『事例の理解が深まる』、学生は思ったより『深い討論』を行って【討論の深まり】を感じている。【改善方法】として学生は課題の対応として発言内容の『テンプレートがあると良い』と考え、今の討論方法以外で、LINEのオープンチャットやTeams, slack, chatworkといった『他のもっと良い方法』を検討すべきと考えている。学生は討論して【初めてで楽しかった】と感じ、学生は授業でLINEを用いることを初めてで『新鮮』だと感じ、慣れてくると『楽しかった』と感じ、『課題はない』ので『今後も活用』してほしいと考えている。

以上の結果をまとめたのが図の結果図である。

V. 考 察

学生の遠隔授業内における事例検討においてSNSを用いて討論を行った成果と課題についてM-GTAの結果をもとに考察を行う。

1. SNS を用いた討論の課題

まず、事例検討においてSNSを用いて討論を行った課題について上位カテゴリー【LINE討論の課題】を中心として考察を行っていく。【グループ作成の困難】【グループメンバー】はLINEを用いることならではの手間と考えられる。【グループメンバー】の『グループの学生の情報がほしい』といった課題に対しては、教員からLINEグループでの自己紹介を投げかけているが、活発には行われていないのが現状で、より積極的に呼びかけるなどの対策は立てやすいと考えられる。

これに対してSNS特有のものと考えられるのは【文字入力の問題】【非言語的情報がない】である。【文字入力の問題】では討論時間が限られているのに対して、LINEでの文字入力に慣れていない学生にとっては時間がかかることは当然であり、『文字を打つのに時間がかかる』『意見が投稿されるまで時間がかかる』といった概念が生成されるのは自然なことと考える。これについては十分な討論時間が求められると考えられる。後述する利点の一つである『考える時間』も含めて討論時間の確保が一つの課題であると言える。

また、【非言語的情報がない】はSNSの使用ではあり得ることだが、『発言に誤解が生じる』では具体的に「発言者が意見をまとめてくれるのはいいが、自分が発言した意

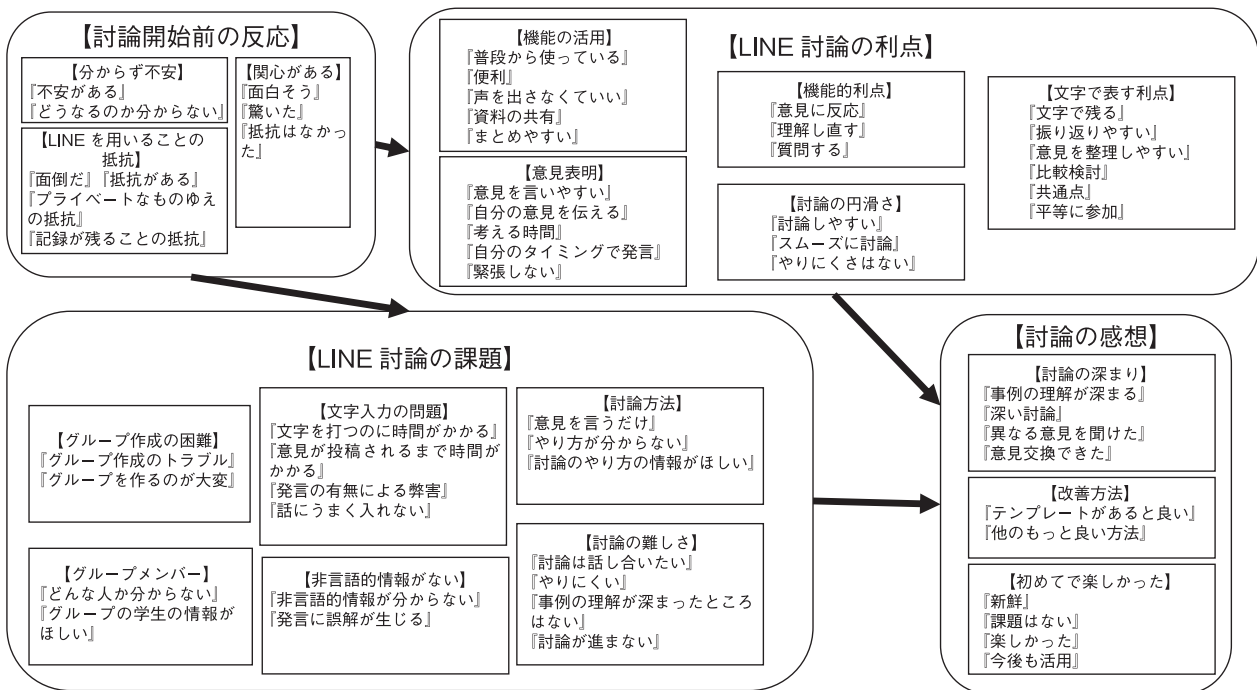


図 結果図

見を違う意味で受け取り、そのまま記載されたことにより、より質問を受けた点」(表1の(5)の回答、以下括弧内は表1の質問内容を指す)といった意見があり、発言の理解や討論を深めることも課題であると考えられる。これに対して後述する利点の『意見に反応』では具体的意見として「しかし、LINEは他の文字ツール(ZOOMチャットなど)と比べると、口頭に近い討論はできるのかなと思う(発言を指定したうえで返信機能、反応機能、スタンプなどがあるため)」(10)があることから反応やスタンプなどの活用も推奨されると考えられる。

このようなLINE特有の課題と討論時間から【討論方法】に行き着いていると考えられる。『討論のやり方の情報がほしい』に見られるように教員からLINEでの討論方法の提示が必要と考えられる。伊藤ら(2021)は遠隔授業の困ったこととして勉強のペースがつかみにくいことを上げており、ある程度の教員からの討論方法についての提示が必要と考える。【討論の難しさ】の『討論は話し合いたい』や【LINEを用いることの抵抗】といったSNSを授業で使うこと自体に関する抵抗もあり、考慮の余地はあると考える。

以上のことから文字入力や非言語的情報がないことの課題があり、そのことが学生に討論の難しさを感じさせていると考えられる。教員からSNSによる討論方法の提示が求められると考えられる。

2. SNSを用いた討論の成果

では前述の討論方法の提示としてどのようなことを述べればよいであろうか。これについてM-GTAの結果の上位カテゴリー【LINE討論の利点】を中心に考えていきたい。まず【機能の活用】【機能的利点】に見られるLINEの機能を活用した討論である。討論に使うSNSにLINEを選んだのは前述したように学生の利用が多い(東京工科大学, 2021)からであるが、【機能の活用】の『普段から使っている』『便利』といったものはそうした普段使用しているSNSであるからこそ、授業への応用が効くということが考えられる。『資料の共有』『まとめやすい』という概念が生成されていることもこのことから考えられる。【機能的利点】の『理解し直す』『質問する』といったLINEの機能を活用した討論の展開が学生はできている。こうしたLINEの機能の活用は学生が使い慣れているSNSだからできるものだと言える。田村(2003)はメールカウンセリングの特徴としてキーボードで表現することを上げ、自分の気持ちを速いスピードで伝えることができると述べているが、こうしたことは同様のことと考えられる。

こうしたLINEの機能をもとにしながら学生は討論を行う。【意見表明】では『緊張しない』『意見を言いやすい』が見られる。『意見を言いやすい』では具体的意見として「ZOOM内でグループディスカッションを行うよりも、発言しやすいと感じた」(3)「今まで関わったことのない人

とワークするのであれば、お互い顔を知らないため、匿名チャットのような感じで気軽に自分の意見が出せた点」(8)があり、事例検討において意見を伝えることの抵抗の少なさが考えられる。

また、『考える時間』での具体的意見として「トーク画面が残るため、意見の聞き逃しがなく、自分で考える時間が対面よりも多くとれたこと」(4)といった自分がじっくり考えて発言できることを表す概念が生成されている。これは対面での討論では目の前のコミュニケーションに追われて熟考する時間が取れないのに対し、LINE特有のことと考えられる。『自分のタイミングで発言』も同じく対面と比べて文脈や討論の流れと関係なく発言できることを学生が実感しており、こういった利点が後述する『平等に参加』に関係していると考えられる。

そして【文字で表す利点】がSNSで討論する大きな利点であると考えられる。『文字で残る』『振り返りやすい』は相模(2021)でもLINEでの討論を学生が復習に用いることを指摘しているが、このような復習が学生の【討論の深まり】といった学生の学習に貢献していると考えられる。和栗(2020)は近年の大学教育に振り返り力の育成が求められる要因として「知識基盤社会」と、その社会を生き抜くための汎用的な能力育成ニーズの高まりをあげているが、このような形でも振り返り支援が行える可能性があると考えられる。

これに加えて『比較検討』『共通点』といった討論の展開にも文字による利点がある。『比較検討』では具体的意見として「情報が共有しやすいので、他の受講者の意見を比較検討しやすかった」(6)などがあり、情報共有のしやすさが比較できることに繋がっていると言える。また、『共通点』でも具体的意見として「複数人の意見の共通点を探すことが容易であったため、多くの人にとっての共通認識を把握することができた点」(6)といった同様の利点が考えられる。これらゆえに『平等に参加』するといったことが可能となる。具体的意見として「文字上のやりとりは声がかぶる心配もないため、一斉に意見を共有することができ、時間の都合で意見を言えなくなってしまう人が出ないのが良い点だと感じました」(8)とあり、討論における発言力や権力関係が生まれにくいと考えられる。このように学生は討論の利点を体感していると考えられる。

事例検討においては『異なる意見を聞いた』『意見交換できた』はSNSを用いた事例検討であっても、実際の討論と変わらない効果があると考えられるが、『事例の理解が深まる』の具体的意見「討論を重ねるごとに、事例についての理解が深まったと思います」(3)のような討論を重ねることによる事例理解の深まりは、前述したLINEの機能や特性を活かした討論を行うことによって可能となっており、このことが『深い討論』と学生が感じていると考えられる。

以上のことから普段から学生が使用している LINE の機能を活用し、じっくり考えて意見を伝えていくことで文字に残す利点を活用して学生は討論を進めていると考えられる。

3. SNS を用いた討論の改善について

これまで SNS を用いた事例検討の討論について課題と利点を考えてきたが、それを踏まえた改善点について考えたい。

上位カテゴリー【討論の感想】で【改善方法】には『他のもっと良い方法』として学生の具体的意見として「LINE ではなく slack や chatwork の方が適していると感じました。」(10)「グループ作成するときに少々やっかいだったので、LINE の新機能の一つ、オープンチャットを使用するのも有効かなと思った」(10)が上げられていたが、LINE を普段から使っていることの利点が学生には大きいと考え、他の SNS 使用より LINE の使用の方が良いと考えられる。また、LINE のオープンチャットの検討の方が【LINE を用いることの抵抗】が少しでも減らせる効果が期待でき、可能性があると考え。

また、前述した『討論のやり方』については 2. に述べてきた LINE の機能を用いた利点や【意見表明】で述べた点について教員から学生に伝えていくことで【文字入力の問題】など緩和できる可能性があると考え。また『振り返りやすい』といった学生に復習を勧めることにより、復習の方法の一つとしてアピールすることが求められると考えられる。

以上のことから結果をもとに教員が学生に LINE での討論方法を伝えていくことの必要性が考えられる。

4. まとめ

本研究では SNS における事例検討の討論の成果と課題について M-GTA の結果をもとに検討した。結果より改善の方向性が考えられ、今後も SNS を用いた討論について発展していく必要性が考えられた。

付 記

本研究の一部は日本心理臨床学会第 41 回大会 Web 大会で発表されました。

引用文献

- 樋口広思, 越中康治, 久保順也, 平真木夫, 田端健人, 梨本雄太郎, 本図愛実 2021 コロナ禍における大学の遠隔授業～学生アンケートの数量的・質的分析をもとに～ 宮城教育大学教職大学院紀要 2, 53-72.
- 伊藤大河, 秋山高善, 神山友宏, 高木祥 2021 共栄大学における遠隔授業の実施と授業評価に関する一考察 共栄大学研究論集 19, 137-152.

- 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 一質的研究への誘い 弘文堂
- 村山正治 1998 新しいスクールカウンセラー 臨床心理士による活動と展開 ナカニシヤ出版 74-75.
- 大川内隆朗, 小林貴之, 毒島雄二, 田中絵里子 2021 遠隔授業における学生の意識と教育効果の調査研究 ー日本大学文学部事例ー 日本大学 FD 研究 9, 1-12.
- 相模健人, 渡部光 2004 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その 4 ー解決志向セラピーの質問方法を用いてー 愛媛大学教育学部紀要 51 (1), 71-76.
- 相模健人 2006 教員養成学部におけるカウンセリング分野の教育システムの開発 ー自らのこれまでの研究とこれからの研究方針についてー 愛媛大学教育学部紀要 53 (1), 57-60.
- 相模健人 2021 学生が遠隔授業に対処していく過程 ー修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてー 大学教育実践ジャーナル 19, 121-129.
- 杉浦晶子, 杉浦伸 2016 高等教育における SNS 活用に関する文献レビューと取組事例の報告 愛知工業大学研究報告 51, 25-29.
- 田村毅 2003 インターネット・セラピーへの招待 心理療法の新たな世界 新曜社 146.
- 東京工科大学 2021 新入生の「コミュニケーションツール」利用実態調査 東京工科大学プレスリリース <https://www.teu.ac.jp/press/2021.html?id=92> (2022年2月24日確認)
- 鶴田和美 2001 事例のプレゼンテーション 山本力, 鶴田和美編集 心理臨床家のための「事例研究」の進め方 北王子書房 80-87.
- 和栗百恵 2020 「ふりかえり」と学習 ー大学教育におけるふりかえり支援のためにー 国立教育政策研究所紀要 139, 85-100.